

The Membership of the National Museum of Modern Art, Kyoto

京都国立近代美術館  
友の会会報

2006  
EARLY SUMMER  
第9号



「タビスリーの裸婦」1923年 京都国立近代美術館蔵

©Kimiyo Fojita & SPDA, Tokyo, 2006

展覧会の

見どころ

## 生誕120年—藤田嗣治展

5月30日[火]—7月23日[日]

7月17日を除く毎月曜日および7月18日(火)休館

毎金曜日は午後8時まで、夜間開館(入場は午後7時30分まで)

今年には藤田嗣治の生誕120年の年にあたります。東京に生まれ、明治38(1903)年、東京美術学校(現東京芸術大学)西洋画科に入学、在学中から黒田清輝が明治29(1896)年創設した「白馬会」の展覧会に出品したりしますが、本科卒業後は当時東京美術学校の教授であった和田英作の助手として、帝国劇場の壁画制作を手伝いました。

大正2(1913)年、藤田はフランスに渡り、パリで制作を始めました。これ以降、昭和4年(1929)年、日本へ帰国するまでの16年間は、エコール・ド・パリの画家フジタの華やかな時代でした。大正8(1919)年にはサロン・ドートヌス会員に推挙され、苦心の研究の末に生み出した白のマチエールは、「深いすばらしい白」(grand fond blanc)と称賛され、白い裸婦の画家として、フジタはパリ画壇の寵児的な存在となってゆきました。

フジタは昭和4(1929)年、帰国し、東京で個展を開くとともに、帝展に「自画像」を出品、翌5年には北米経

由でパリに戻りました。そして、5年から8年にかけては、ニューヨーク、シカゴ、パリ、中南米などを巡り、制作を続けました。

昭和8(1933)末に日本へ戻った藤田は、翌年には二科会会員に推挙され、二科展を中心に制作を行いました。パリを離れて、藤田の作風は写実味を増し、内面に突き入るものになってゆきます。昭和14(1939)年から15(1940)にかけて再びアメリカ経由パリへ行きますが、第二次世界大戦の戦火がヨーロッパで激しくなり、帰国を余儀なくされました。戦後は、戦時中多くの画家が画いた戦争絵画について、画家の間に動揺が広がり、それに対する画壇の状況などを見るにつけ、藤田は失望の思いを深め、昭和24年(1949)、若い頃の制作に地であるパリに、ニューヨークを経て、戻りました。昭和30(1955)にはフランス国籍を取得、再び日本には戻りませんでした。晩年の藤田は、宗教画や寓話や子供をテーマにした作品を、線と色彩の独特の調和の中に画きました。

8月の企画展

## 生誕120年—富本憲吉展

8月1日[火]—9月10日[日]

毎月曜日休館、金曜日は午後8時まで夜間開館

(入場は午後7時30分まで)

富本も藤田と同年の生まれです。法隆寺や法起寺に近い奈良西の京に生まれ、明治37(1904)年、地元の中学校から東京美術学校図案科に進みました。在学中に建築、室内装飾を学んで、明治41(1908)年、英国へ私費留学します。留学中、ロンドンのヴィクトリア・アンド・アルバート美術館の工芸品のスケッチ、セントラル・スクール・オブ・アーツのステンドグラス科での学習、エジプト、インド旅行などを果たし、これらの成果が総て、後の憲吉の陶芸の制作の糧となってゆきました。明治44(1911)日本へ帰国。その年、パーナード・リーチを知りました。リーチとの親交を得たことによって、憲吉は作陶の道を歩み出しま

した。

以後の富本憲吉は、初期の楽焼、白磁、染付、昭和初期、東京祖師谷時代の色絵磁器(石川県九谷の北出塔次郎窯で研修しました。)、戦後京都時代の色絵金銀彩と、シンプルなものから華麗なものまで、親しみ易く、しかも品格ある芸術を完成させました。スケッチ、素描、陶印なども併せて展示します。



富本憲吉 色絵染付椿模様装飾箱 昭和16年(1941)

美

心

短

信

## 日本画に見る鳥獣戯画

藤田嗣治の作品には猫がしばしば登場します。モデルの少女の愛猫の場合もあり、また、ペローの寓話に登場する人間くさい猫の場合もあります。画面全体を飛び跳ねる群猫は、猫の活発な生態を余す所なく描写していますが、作品には、具体的には解らぬにせよ、寓意が満ち満ちています。日本の動物の戯画で最も有名なのは、鎌倉時代の作と言われる、京都・高山寺蔵の「鳥獣戯画」でしょう。人間界の醜くまた滑稽な争いを、なめらかな筆使いで、猿や蛙、鹿、兎など、日本の野山に住む動物に託して画いています。日本の中世の絵巻には、他にも、同じく鎌倉時代の作とされる「天狗草紙」など、当時の仏教界を諷刺した戯画が遺されています。

見るも恥ずかしい茶番劇は、人間界のどこでも、いつでも演じられている訳ですが、その泥沼も、鳥獣に仮託することで毒気が抜け、むしろ、親しみやすいものになります。いわゆる「京童」などと言われた人々は、このような転換術の天才だったのかも知れません。

近代の美術界にも、鳥獣戯画に値する事件が数限りなくありました。明治28年（1895）、第4回内国勸業博覧会に黒田清輝が出品した油絵の裸体画「朝妝」をめぐるまき起こった裸体画論争、明治31年（1898）、校長に不適格という誹謗を受けて、岡倉天心が東京美術学校校長を辞職した事件、明治40年（1907）文部省美術展覧会の開催に伴ってあらわになった新派・旧派の対立、その帰結としての日本美術院の再興、そして、昭和10年（1935）の帝展改組にからむ画界の大混乱などは、その主な例でしょう。歴史の目を通して見れば、これらの騒動は取るに足らないものばかりですが、当時の当人にとっては全く真剣勝負そのものだったのです。

ここに掲げた図は、昭和12年（1937）、竹内栖鳳が第1回新文展に出品した2曲1双の屏風「若き家鴨」（部分）です。やっと雛鳥から若鳥へ成長したばかりのアヒルたちは、餌を与えられて、騒々しく餌場へ集まってきます。砂浴びに熱中して気付かない数羽もいます。栖鳳の最も得意と



竹内栖鳳 若き家鴨(部分) 昭和12年(1937) 第1回新文展

する動物の描写ですが、動物を主人公に、彼らの群衆心理を表現することも、栖鳳は若い時代から好んで何度も取り上げてきたテーマでした。昼寝する犬と落ち穂に群がる雀の騒々しさを対比的に画いた「百騒一睡」（1895）、落ち着かぬ猿の動きと兎たちののどかさを対比させた「飼われたる猿と兎」（1908）、昭和11年（1936）文展招待展に出した「夏鹿」の、一頭が跳ねて、つづいて集団が駆けだそうとする瞬間の動きなど、どれも巧みな動物の生態の把握を見せながら、背後に人間界の出来事への強い寓意が見てとれます。「夏鹿」と「若き家鴨」の画かれた時期は、時の岡田内閣の閣僚の一人であった松田文部大臣が提案した帝国美術院と帝展改組案をめぐる、画壇が大混乱に陥った時期でもありました。文相の案は、在野団体である日本美術院と帝国美術院（帝展）を総合統一する案であったため、無鑑査などの既得権を持つ帝展の画家を中心に、新人事への不安、不信感が広がりました。混乱から、昭和10年の帝展は開催することが出来ず、翌11年も招待展と鑑査展（新人展）に分けて開催という変則的な展覧会になりました。京都画壇のいわば頭領格であった栖鳳は、長く沈黙を守りましたが、文部省の統制的な考え方には、終始批判的でした。子息の竹内逸氏の著書『栖鳳閑話』に、栖鳳のこの事件への談話が載っています。「統制も結構ですが、まあ美術の統制なんて一番後回しで宜しいでせう。矢張り美術といふものは、恰度虹の七色のやうなもので、幾ツもの団体が集まって美しく競ふべきもので、その虹を一色に塗り潰すことは、私は到底賛成できません。」

栖鳳はこの騒動を、「若き家鴨」の画面の、餌場に騒ぎ集まるアヒルと、のんびり砂浴びするアヒルの対比によって、品よく、しかし、強く揶揄したのかも知れません。

（加藤類子・友の会事務局長）

## コレクション・ギャラリーの小企画

5月23日(火)―8月6日(日)

休館:7月17日を除く毎月曜及び7月18日(火)

### 藤田嗣治と二科・九室会の画家たち

5月30日から、待望久しい藤田嗣治(1886-1968)の画業を網羅したはじめての回顧展が、京都国立近代美術館でも開催の運びとなります。この展覧会には、初公開作品20余点を含む93点の代表作と、画家の生涯を偲ぶ諸資料が出品されますが、それでもなお、紹介し得ない藤田嗣治の活動が残されています。それが1933(昭和8)年11月に帰国してから、1939(昭和14)年にふたたび日本を離れるまでの国内各地での活動です。なかでも、もっとも注目すべきなのが、1934年3月二科会員となり、「二科内で最も目立ち、対外的にも二科会の“顔”のような存在であったのは藤田嗣治だ」(瀧梯三)という指摘でしょう。ニュー・リーダーとして、藤田は二科のなかで重要な位置をしめてゆきました。

こうした藤田の活動を、当時の美術雑誌の記事から拾いだして検証し、そして藤田が顧問ともなった、吉原治良らを中心とする二

科の前衛集団「九室会」に参加した画家たちの作品を集めてみたのが今回の小企画です。戦前から戦後にかけて新たな表現を求めたその動向の一端を、「藤田嗣治展」とあわせて、ぜひコレクション・ギャラリーでご覧ください。(山野英嗣)



伊藤久三郎 皮膚 昭和9年(1934) 第21回二科展

## 友の会の催し

### 芸大生によるサマーナイト・コンサート

昨年、大変好評だった京都市立芸術大学音楽学部の学生によるコンサートを、今年も、同校との共催で開きます。第1回目は「生誕120年記念・藤田嗣治展」の開催に因んで、フジタの愛した街パリをテーマにプログラムが組まれています。コンサートのタイトルも「みんながパリを愛してた!」です。

日時: 2006年6月3日(土) 18:00から

会場: 当館1階ロビー

定員: 150名(先着順)

入場料: 無料

プログラム:

モーツァルト: ディアブルティメント 二長調 K136(125a)

ブーランク: 六重奏曲 フルート、オーボエ、クラリネット、バスーン、

ホルンとピアノのための

ミヨー: マリンバ、ヴィブラフォンと管弦楽のための協奏曲

モーツァルト: 交響曲第31番 二長調「パリ」K297(300a)

曲目は当日、都合によって変更されることもあります。

### 友の会会員を募集しています!

友の会には年会費5,000円(学生は3,000円)でご入会いただけます。また、美術館をサポートしていただくため、年会費20,000円の特別会員、年会費一口100,000円の法人会員へのご入会もお願いしています。本館の展覧会その他の事業へのご参加のほか、他の国立美術館常設展へもご入会いただけます。この機会に是非ご入会下さい。

- 開館時間  
午前9時30分～午後5時(入館は午後4時30分まで)
  - 夜間開館  
4月15日(金)―9月2日(金)までの企画展開催中の金曜日  
午前9時30分～午後8時まで(入館は午後7時30分まで)
  - 休館日  
毎週月曜日(月曜日が休日に当たる場合は、翌日が休館)、及び年末年始  
(開館時間、休館日は臨時に変更する場合があります)
- ※お車でお越しの場合 岡崎公園駐車場(地下)をご利用の有料入館者は、駐車場の割引(1台1名)を受けられますので、駐車券をお持ちの上お越しください。

### ● 交通案内



独立行政法人国立美術館

## 京都国立近代美術館

The National Museum of Modern Art, Kyoto

〒606-8344 京都市左京区岡崎円勝寺町  
TEL. 075-761-4111

テレフォンサービス 075-761-9900

ホームページ <http://www.momak.go.jp>